

提案趣旨説明書

〈作品タイトル〉

トモシヴィレッジ



〈提案の趣旨〉

【全体構想】

みんなが使い続けたい場所とは何か…。

場のデザインとして大事にしたのは、場の使い方をこちらから細かく提示するのではなく、使う人が「こんな場所でこういうことをしたい!」と思えるような、様々な発想が生まれる場をつくることであり、「家や街にも無いような場所で居心地がいいな。」と思える非日常的な風景をつくることに主眼を置きました。非日常的な風景と言いながら、いつかの古き良き時代に見た集落のような場所をつくりたい。三河土のレンガブロックでできた小山状の建物からは灯火の明かりが街なかに漏れて、建物の間には貸し農園があり、街の機械的な冷たさとは対照的な温かみのある場所をつくりたい。一見、「街」という存在とは対照的な「集落（ヴィレッジ）」をもってくることで、非日常的な景色の中で、使う人たちの様々な発想が膨らみます。

【三河安城らしさと灯火】

稲作や畑作、果樹や畜産などの多角経営農業を推進した安城市は、かつて「日本のデンマーク」と呼ばれ、全国の農業経営モデルとなってきました。この農業先進都市としての発展には、もちろん、農業用水路「明治用水」の豊かな水に恵まれたことや、起伏が少なく平地が広がっているという地理的条件の影響もありますが、忘れてはならないのは、農家の協同意識が強かったことや産業組合が早くに形成されるなど、人同士のつながりが強かったからこそその発展でもありました。

この「協同意識」を「集落（ヴィレッジ）」に置き換え、場のデザインとして浮き上がらせます。

この「集落（ヴィレッジ）」を支えるのは、既存の農業基盤を生かして供給するバイオエタノール暖炉。少子高齢社会による生産過多になった一部の農作物や多発する災害により被害を受けた農作物、そして畜産農家から出る糞尿などをバイオエタノールとして活用します。

暖炉の灯火が街なかを灯し（トモシ）、この安城市の取り組みが、駅前広場において市民にも「見える化」することで、灯された火と共に、使い続けたい気持ち芽生えます。

【定刻通りに通過させずに下車させるために】

家にも街にも無いような場所をつくる。場所の魅力は人を惹きつけますが、それだけでは足りません。通過するだけというネタになっている要素をあえて生かすことができる施設として、貸し農園を設けます。都市部の人たちが都市郊外に行くよりも、出張や通学などで実はよく通っているという三河安城駅。普段触れることができない農園（自然）を、三河安城駅という通り道に設けることで、帰宅のついでや休日にも気軽に寄れる都市部の人たちの隠れ家ならぬ隠れ駅を目指します。